

# 『黄金伝説』におけるマグダラのマリア伝にみる

## 救済の教義の大衆化

モリス・ジョン\*

The *Legenda aurea* Life of Mary Magdalene and the Popularization of Salvation Doctrines  
Jon MORRIS\*

### Abstract

This paper is part of an ongoing group research project that considers the ways in which religion changed amid the social transitions spanning the Middle Ages and Early Modernity, both in Japan and Europe. The project aims to reassess received notions of periodization in the light of more nuanced understandings of medieval preaching.

The church in the 13<sup>th</sup> century was making concerted efforts, spearheaded by the itinerant orders, to preach the universal hope of salvation through confession, penance and purgatory. The increased concern with personal piety and post-mortem wellbeing among the general populace which developed at that time may be understood as integral to the intellectual transition which provided the basis for Protestantism and Early Modern forms of European religiosity. Using a hermeneutic approach, this paper examines the role of Mary Magdalene in the most popular hagiographic work of the Middle Ages, the *Legenda aurea*, in relation to contemporary social and ecclesiastical change.

The outstanding feature of this highly accessible hagiography is the hortatory impact of Mary Magdalene's own holy life and her (post-mortem) role in ensuring her devotees access to confession, penance and communion. These aspects would not be so clearly expressed in this hagiography were it not for the significance of Magdalene to the popular preaching of penance and to the preaching orders in the thirteenth century, particularly as patron saint of the Dominicans.

## はじめに

中世の宗教思想と近世の宗教思想の間のつながりを理解するには、どうすれば良いのだろうか。本論は現在も進行中のグループ研究の一環であり、中世から近世への社会の変遷の中で宗教がどのように変わっていったのかを考察する。本論では内容分析のアプローチを用い、中世に人気を博した主要聖人伝に記されている、ある有名な聖人の役割を、社会や教会の変化という背景に照らして検討する<sup>1</sup>。

教会の教義や制度には、一三世紀に大きな変化があった。そうした変化の中で、煉獄と告解と悔悛による救済という希望がもたらされたのだが、そこで聖人への崇敬は重要な役割を果たした。特に、順回説教をする修道僧たちの説教が、大きな効果を有した。その結果、カトリック教会の教化活動の中心が、個々の信仰者の救済のための内面的信仰へと移ることになった。これは、一般的な信仰者でも広く救済の可能性を見出せるようにしたいという、教会の一致した努力の一環であった。民衆の間では死後の幸福と個人の敬虔という問題への関心が高まったが、これはプロテストантиズムや近世のヨーロッパの宗教性の源となった動きの一環と見なせる。つまり、中世には説教と写本の流布による教義の普及が見られたが、それと近世化との間の関連性が、こうした傾向の中に窺える。

「近世化」という用語自体が多義性・多様性を持つが、宗教の役割を軽視することは出来ない。近世的な宗教の特色は何かということを考える上で聖教や説教という媒体によって教義が大衆に普及されることが最も著しい特徴として挙げられるかもしれない。マグダラ伝の思

想と普及に関して、岡田温司氏とJansen氏の著書は主要な先行研究としてあげることができる<sup>2</sup>。両氏の研究は、マグダラに関する資料をほぼすべて網羅している。本稿では『黄金伝説』(Legenda Aurea)におけるマグダラの聖女マリア伝の内容分析によって、当時の説教活動にみる「近世化」を明確にする。

一二六七年頃に筆録された『黄金伝説』は、ヨーロッパ中世において最も著名な聖人伝集成である。編集者のJacobus de Voragine(一二三〇―九八年)はジェノヴァ大司教であると同時にドミニコ会修道士(一二―一三世紀には托鉢修道会が設立され、大衆への説教を行っていた)でもあったので、同会が当時従事していた説教活動を最前線で展開していた。『黄金伝説』は、説教の場で活用することができ、救済が得られるかどうかについて大衆の興味をそそりながら面白く、また大衆が理解できるような形式をとる聖人伝を収録することを目的として執筆された。このように説教の台本集として編纂された『黄金伝説』は装飾付き写本となり、やがて個人向けの教本として大変広範に普及していった。

確かに、『黄金伝説』は大衆教化に尽力していたVoragineが当初期待していたよりも大成功を収めた。聖書は当時、主に部分的に映られて、一部の人たちの関心の対象にすぎず、それよりも広く受容された『黄金伝説』は多くの人の信仰を深めた。しかし、その大多数が奇跡を主な題材とする聖人伝とは異なり、本来説教のテキストであった『黄金伝説』は、当時の神学または教会における様々な関心を明瞭に表すものとなっている。したがって、教義に主眼を置く教会と大衆との交

流を分析する思想史研究では、『黄金伝説』は中心的な資料となるのである。もちろん、『黄金伝説』は十三世紀に存在する唯一の聖人伝集ではなかった。『黄金伝説』以前に成立したJean de Mailly（生没年不詳）の *Abbreuiatio in gestis et miraculis sanctorum*（一二二五年以降成立）はドミニコ会のテキストで、『黄金伝説』の出典の一つであった。

さて、思想史研究の観点から『黄金伝説』にみられる特徴とはなんであろうか。まず、本資料を一二世紀以降の新たな説教の運動とそれにとみなう（Arnold氏が述べる）救済方法をめぐる「好奇心」の環境として位置づけるべきであろう。中世後期における「個人的」救済に対する関心の高まりと、『黄金伝説』に見られるテーマには密接な関係があった。「煉獄」の目的や、それが具体的にどこにあるのかといった問題を扱う第一五六話「奉教諸死者の記念」はその一例である。この話は、死者の新たな行き先や、罪深い俗人の清めの場合である煉獄について説明する説教の「台本」であると考えられる。ここでは数人の神学者の解釈が展開されており、『黄金伝説』の内容が聖人の生涯や崇拜に限るものではないことが明らかである。多くの現代人は天国に直接行くことを期待するため、煉獄は分かりにくい存在である。しかし、中世では煉獄という概念は（教会から疎外され）直接天国に入ることが期待できなかった一般信者に、救済の機会を提供する役割を担っていた。これは当時の救済論において必然的な存在となっていた。（J. Goh氏が造語した「煉獄の誕生」<sup>4</sup>）によってもたらされた転換点より前は、教会は一般信者にもっぱら外面的な信仰行為を求め、内面的信仰は神に委ねる傾向が強かった。一二五四年、法王によって煉獄の正式

な定義が下された。それは『黄金伝説』の成立年に近く、当時のカトリック思想の中で、同じ信仰の内面化傾向の一環とみなしてよいだろう。思想史の観点から言えば、C. Morris氏が述べた「団体的信仰から個人的信仰へ」を伴う傾向であると考えられる。

一一世紀には、救済は一般信者ではなく、主に「世の厭い」をする神職者のものであった。教会は「罪の償い」等といった外面的行為を一般信者に求め、前述のように内面的信仰は神に任せる傾向が強かった。それに対して、個人が自身の救済を望み、改悛するという内面的信仰が一二世紀の救済論の中心部分であった。生前には教会における告解と改悛があり、死後には煉獄という改悛の場があった。マグダラの聖女マリアは改悛の模範であり、キリストと寄り添う聖人であり、さらに改悛者の守護者であった。聖書において娼婦とされていないかったマグダラのマリアは五九一年頃における法王グレゴリウス一世（五四〇～六〇四）の描写以降に元娼婦とみなすことは、現在では男女差別であるとして否定されつつある。それに対して「マグダラの聖女マリア」は、救済の機会の普遍性を強調する聖人であるからこそ、一二九七年にドミニコ会の守護聖人になったのである。

改悛後、『黄金伝説』第九一話に登場するマグダラの聖女マリアは、聖なる人生を送ることにより、俗人がキリスト教者として生きる模範ともなる。マグダラが信者の模範となった背景には、一般信者を本物のキリスト教徒として認めるというかつてない動きがあった。たとえば、枢機卿の地位にあったフランスの神学者であり、史家でもあったJacques de Vitry（一二六〇～一二四〇年）は、授戒者（*regulares*）

は神職者に限らず、あらゆるキリストの掟に従う者は授戒者であると主張した。<sup>6</sup>『黄金伝説』のマグダラのマリアは、女性にもかかわらず説教を行い、奇跡をもたらし、教会の指導役として造型されていく。「使徒達への使徒」と呼ばれるマグダラのマリアの説教は、『黄金伝説』において六回にわたって言及されている。これは一般信者に近い存在である救済された「罪の女」が主役になっており、本資料は罪深い俗人が恩寵と悔俊によって清められることを説明する説教の「台本」であると考えられる。資料順に、その「台本」の特徴を考察しよう。

### 『黄金伝説』第九一話 マグダラの聖女マリア

#### 資料1 per gratiae superabundantium

マグダラのマリアすなわちマリア・マグダレナは、たんにマグダレナともよばれ、このマグダレナ (Magdalena) という語は、*manens rea* というのとおなじで、「罪ある女、罪の女」という意味である。あるいは「身を固めた女」または「きらやかな女」という意味である。この三つの意味は、回心前、回心のとき、回心の彼女の姿をあらわしている。というのは、回心前のマリアは、永劫の罰にあたいたするようなことをしていたのだから、「罪の女」であった。回心のときは、悔俊という甲胃で（身を固めた）。というのは、悔俊のあらゆる武器でがつしり武装し、また、かつては多くの欲情に身をまかせたけれども、回心のときはそれだけ多くの犠牲をはらったからである。回心後のマリアは、あふれるばかりの恩寵を受けてきらやかに光りかがやいていた。というのは、

罪が増しくわったところには恩寵もいや増すと言われるからである。<sup>7</sup>

この資料は、『黄金伝説』にあるマグダレーナ伝説の冒頭にあるものである。まずマグダレーナという名前の解釈について考えられるところをいくつか説明している。実際にはこの名前の元は「塔」というヘブライ語 (*migdalai nati*) であり、『黄金伝説』にある解釈は一種の推察に過ぎない。『黄金伝説』にも、聖人に関する中世の説教にも、そうした推察がよく登場する。そうした敬虔な思弁は役に立つもので、説教の初めにそれを述べれば、覚えやすかった。さらに、教育程度は高いが他人の話を信じようとしないう現代の聴衆とは違い、中世の聴衆にとっては関心を寄せやすいものでもあった。したがって、この資料がもともと説教に用いられたものだということは断言できる。『黄金伝説』の資料の多くも、そうである。確かに本資料はのちに、写本で広く流布し多数の読者を得たのだが、もともとは説教のための参照テキストとして編纂されたものであった。そこからも、この箇所メッセージは本来、広く一般民衆向けであったことが分かる。

資料1からは、マグダレーナ伝説の主な意義が分かる。マグダレーナという存在そのものが一種のたとえ話で、贖罪を示し奨励するモデルとなっている。マグダレーナが罪深い存在でありながら、見事に贖罪により救済されたことが対比され、それが（カトリック）キリスト教世界の内面へと向かう変化に対し背後からインスピレーションをもたらした。この「罪の女」(*peccatrix*) は「永劫の罰」を受けるべき

であったが、「悔俊という甲冑」の徳により救われた。その回心以前の罪深さは、他のいかなる聖人の回心前と比べても深いものであり、そのため自分の生き方があまりにも罪深く贖罪を受けるに値しないと感じている人々にとつての希望となった。一三世紀の教会は告解と改悛を普及させることに努めたが、この資料の用いている語彙にも、それがまさしく反映されている。ここに紹介している引用の最後の行（罪が増し：）は、新約聖書の『ロマ』五章一二節である。

五章二〇説 律法はいり込んできたのは、罪過の増し加わるためである。しかし、罪の増し加わったところには、恵みもますます満ちあふれた。

五章二一節 それは、罪が死によつて支配するに至つたように、恵みもまた義によつて支配し、わたしたちの主イエス・キリストにより、永遠のいのちを得させるためである<sup>8</sup>。

ここから、教会のミッションにおいて新約聖書における贖罪のメッセージを訴え、聖人たちの生涯という人気の高い分野にも利用されたことが分かる。マグダレーナのストーリーからは贖罪に関する聖書の言葉の真実が明確に分かり、それが中世の宗教生活ではより前面に出ていった。

## 資料二 peccatrix

ところで、マグダレーナのほうは、金はあるほどあったし、

金に色はつきものというわけで、自分の美貌と富を善用しない手はないとばかりに肉欲三昧の生活に身をもちくずしたので、世間からほんとうの名前をよんでももらえず、〈罪の女〉としか言われないうようになった。

この資料からは、マグダレーナの生涯が一種の典型とされたという事実が浮き彫りになる。マグダレーナに関する伝承では、この聖人は繰り返し「罪の女」(peccatrix)という呼び方をされている。『黄金伝説』のラテン語本文で強調されている文は「unde jam proprio nomine perditio peccatrix consueverat appellari」であり、これには「ほんとうの名前を失うこと」という意味がある。つまり、彼女は罪のため本来の自己が失われ、一種のラベルと化したのだ。しかし中世の大抵の民衆は、そのラベルと自らを同一視しようとした。そうすることで信仰者は容易に、個別性や具体性を排除してマグダレーナと同一化できるのだ。

著者としては、告解と改悛に関する中世の説教に呼応する、もう一つの側面を指摘したい。Misere mei (Domine Iesu Christe, Fili Dei, misere mei, peccatoris 〈女：peccatrix〉) イエスキリスト、神の子よ、我、罪人を憐れみ給え) のような祈りが広く普及しており、そこでは祈る本人を罪人 peccatrix と特定していた。中世に発生した説教の運動ではそうした内的な回心という姿勢が求められており、そのことは新約聖書のルカ福音書一八章一〇～一四節にある徴税人とファリサイ人の話にも良く表れている。ただし次章で述べるように、



回心後の聖マグダレーナの本質は、罪深さではない。

### 資料三 apostolorum apostolam

主が恵みをお垂れになったときまっさきに悔いあらためたのも、最良のものをえらんだのも、主の足もとにすわって、主の言葉に耳をかたむけ、主の頭に香油をそいだのも、マグダレーナであった。彼女はまた、主が亡くなられたとき十字架のそばに立っていたし、ご遺体にぬる香料と香油の用意もした。弟子たちが墓を立ち去っても、墓を去らなかつた。また、ご復活のキリストは、まっさきに彼女に姿をあらわされ、彼女を使徒たちのもとにつかわす女使徒（使徒とは、つかわされた者、使者）の意とされたのである。<sup>10</sup>

こちらの資料では、イエスの生涯と死においてマグダレーナが重要な役割を果たした様子を列挙し、また悔悛の後に神の恩寵を得た様子も描かれている。マリアの具体的な役割において、彼女は男性であった使徒たちから抜きんでいた。実際、本セクションでは、マグダレーナ自身も使徒のひとりであったことが明確になった。この「使徒」という用語には、キリストの福音を告げる説教というミッションを担う、という含意がある。このことは、いまだに議論の続く問題である。カトリック教会や他の主要教派では、女性が福音の説教や教授を許可されるのは限定された特殊な場合のみであり、それも多くの場合には男性の司祭の監督の下においてのことだ。そのためマグダレーナを使

徒として表すというのは、当時においては大胆な行為であった。その起源はキリストの復活の物語にあり、そこでは復活したキリストが最初にマグダレーナに姿を現している。

前田氏と山口氏の翻訳では、マグダレーナ存在はやや曖昧であり、「使徒たちのもとにつかわす女使徒」というような役割である。De Graesse のラテン語版（前田氏他が使用）では、上記の強調箇所は下記のようになっている。

quae a monumento discipulis recedentibus non recessit, cui  
Christus resurgens primo apparuit et apostolorum apostolam  
fecit.<sup>11</sup>

*apostolorum apostolam fecit* というフレーズは、文字通りに翻訳するなら、「彼女を使徒達への使徒にした」のようになる。実際、Ryan 氏による英語訳では、下線部は次のようになっており、意味が特に明確である（「使徒たちに対する使徒」）。

when the disciples left the tomb, did not go away, to whom the  
risen Christ first appeared, making her an apostle to the  
apostles.<sup>12</sup>

前田氏による『黄金伝説』の日本語翻訳は、研究者たちにとって極めて重要な貢献である。また、宗教テキストを翻訳する者は、必ず何

らかの解釈をせねばならない。前田氏の翻訳では、議論のありそうな個所をやや曖昧に翻訳しているが、これは許容されよう。だが本論文ではその目的から、マグダレーナを使徒たちの一人として見なすことにしよう。実際、聖書では、福音の要となる事実（救済主キリストの復活）を他人に伝えたのはマグダレーナであったとされている。さらに聖書によれば、マグダレーナは使徒たちやその他弟子たちと行動を共にしている（使徒言行録二章一―五節）。つまり、説教というミッシヨンにも携わったのではないかと思われる。

マグダレーナの説教はまた、『黄金伝説』での彼女の伝承においても、重要な側面である。彼女の活動を述べるテキストの中には、説教に当たる動詞が、合計で六回登場している。次の資料は、その良い例である。

#### 資料四 *Christum constantissime praedicabat*

ある日のこと、多くの人びとが偽神たちに供物をささげようと神殿に集まってきたのを見たマグダラのマリアは、うきうきとして立ちあがると、いつもの神々を礼拝することはやめなさいとたくみな言葉で話しかけ、確信にみちた口調でキリストの教えを説いてきかせた。聞いていた人びとはみな、彼女の美貌と甘美な言葉に眼をみはった。われらの主の足にあのような甘美で熱烈な接吻をした口がほかの口よりも神の言葉を上手に伝えることができる<sup>13</sup>。たのは、すこしもふしぎなことではなかったのである。

ここでは、マグダレーナが異教徒に対して説教をしている。しかもこれは後に、多数の祈禱用絵画の題材となった。罪を贖われた罪深い女が説教をしているというのには、いろいろな問題もあるだろうが、それでも説教をしているというだけでなく、なぜマグダレーナは例外的に説教ができるようになったのか、という説明も記してある。心身の両面で彼女はキリストの側近であり、それが理由なのだ。以前の彼女の罪深さも女性であることも、説教を禁じる理由にはならない。多くの点でマグダレーナは、キリストの母であるマリアに対応する存在とされる。聖母マリアは、純粹で罪なき存在とされていた。この二人のマリアは（神の恩寵により）、それぞれキリストの受肉と復活において密接な役割を果たしたのだが、二人の役割はかなり異なる。マグダレーナは女性の限界とされていた限界を超え、女性の贖いの鏡とされており、この事実が彼女による説教を可能にしたとも解釈できる。（『黄金伝説』の著者である）Voragineとドミニコ会の伝承では、教会の階層への配慮から、次の資料にあるように、地上で説教をする権限は最終的にどこから来るのかという問題を読者に説明している。

#### 資料五 *magistri mei Petri, qui Romae praesidet*

ある日、マグダラのマリアが教えを説いていると、領主が言った。「あなたが説いている信仰が真実であることを証明できますか」マリアは答えた。「わたしたちの師で、いまローマの教座にあつて世の尊崇をあつめていらつしやいます望ヘテロさまの日々の奇跡とお説教によつてよろこんでこの信仰を擁護し、それが正しいこ

とを証明してさしあげましょう」そこで、領主は、妻といっしょになつてこう言つた。<sup>14</sup>

ここには、ほぼ教理問答のような形式で質問と回答が明確に提示されている。しかも、使徒ペトロによる法王の権威も確かなものとされている。聖ペトロの座に働く聖霊の力こそ、マグダレーナが説教をする根拠なのだ。つまり、もつともカリスマ的で聖なる説教者といえど、あくまで教会とその階層構造における神の働きに対する信仰が、その説教の根拠とされている。この文章にそうした記載が加えられているのは、驚くに当たらない。それをマグダレーナによる証言の制約と捉えるべきではなく、信仰の対象としての教会を築くものと捉えるべきである。マグダレーナの生涯は改悛の生涯であつたが、告解と改悛を勧めているのは教会であり、教会こそが民衆を内的な回心や煉獄での浄化、そして天国での平和へと導くのである。そしてマグダレーナ自身は、司祭の職以外の教会での生活のあらゆる側面に関わる。

#### 資料六 *supernae contemplationis*

ところで、マグダラのマリアは、天国を見ることのできる境地に達したいとおもひ、人も住まぬ荒野に引きこもつた。そして、天使の手で彼女のために用意されたある場所に、三十年のあいだだれにも知られずに住んだ。そこは、泉もなければ、眼をよるこぼせる草や木もなかった。そのことからわかるように、われらの主は、地上の食べものではなく、天上の食べものだけで彼女をやし

なおうとされたのである。彼女は、毎日七回の祈りの時間に天使たちにみちびかれて天空にあげられ、生身の耳で天の軍勢がうたう賛歌を聞いた。こうして、おいしい天国の食物をご馳走になつてから、また天使たちにみちびかれて自分の住まいにもどつてくる毎日であつたので、地上の食べものは必要としなかつた。<sup>15</sup>

このセクションでは、マグダレーナは女性でありながら俗世を退き独居修道士のように生きている。一三世紀の女子修道会は広く社会で高い評価を得ていたわけではなく、中には当時の社会規範では管理できない、あるいは恥ずべき存在とされた女性たちを多数収容していた女子修道院も多くあつた。ここではマグダレーナは隠遁修道者として優れて聖なる生活を送っており、教会制度とのかかわりとは無関係に、内的な贖罪の効力を実証している。前田氏と山口氏による「天国を見ることのできる」という翻訳は、いくらか問題である。無論、翻訳者には独自の解釈をすることを認めねばならないが、だが、「瞑想する・沈思する」(*contemplationis*) から「見る」に至るには、かなりの解釈が必要となる。「見る」では、マグダレーナは受け身であり、中世の奇跡物語の聖なる有り様というファンタジーを想起している。「瞑想する・沈思する」では、マグダレーナは自分の能力において、天国の様子を観想している。太字箇所元のラテン語は、次のとおりである。

*Interrea beata Maria Magdalena supernae contemplationis avida  
asperillum eremum petit et in loco angelicis manibus*



praeparato per XXX annos incognita manst.<sup>16</sup>

より字義的に日本語に翻訳するなら、「天への瞑想に専心することを望んで」という感じに近くなる。Ryan氏による英語翻訳も、次のように元のラテン語の「瞑想する」を保持している。

At this time blessed Mary Magdalene, wishing to devote herself  
to heavenly contemplation, retired to an empty wilderness, and  
lived unknown for thirty years in a place made ready by the  
hands of angels.<sup>17</sup>

eremum (じもる) という動詞は語源的に、現代英語の eremite (隠者、世捨て人、語源 一二〇〇年ごろ、後期ラテン語 eremita ≡ 隠者) と関係している。古代の砂漠の隠遁修道士たちのように、俗世を拒んだ禁欲者として生きるとの含意がある。

中世には、多数の女性の聖人や隠者がいたが、あくまで司祭(男性)の指示のもとで生きるのが原則とされた。しかしここではその立場が逆転しており、天国に近いマグダレーナが司祭を導いている。

資料七・A accede huc propius nec fugias filiam tuam, pater

当日言われた時刻にひとりで教会に入っていた。すると、マグダラのマリアがつきそってきた天使たちの群れのなかに立っているのが見えた。しかし、聖女は、地面から二キュピトの高さにあ

げられていて、天使たちのまんなかに立ち、両手をひろげて主に祈っていた。聖マクシムスが怖れて近づきかねていると、彼女は、ふりむいて言った。「神父さま、もっとこちらへお寄りください。<sup>18</sup> あなたの娘のまえからお逃げになるものではありません。」

このテキストもこの段階に来ると、すべての聖人伝の「クロノトープ」つまり時空の表示という段階になる。つまり、その聖人の聖なる他界である。マグダレーナの祈りは今や高度に神聖なものとなっており、天使によって携えあげられ、あたかも現世を拒んだ彼女の努力が結実したかのように思える。この当時、教会では改革が進んでいたことを忘れてはならない。聖職者たちの欠点が、浮かび上がっていたのだ。マグダレーナが代表する女性信徒を避けないよう、聖職者たちには指示が出ていた。確かに教会の民衆に対するミッシェンである告解と改悛では、聖職者が信徒の近くにすることが要求される。ところが現実には聖職者が担当教区から不在の場合が多かった、一般の信徒たちも、本来なら受けられるはずの告解とミッサになかなか参加できない、参加しない場合が多かった。少なくとも著者にとっては、次の引用個所では、贖罪という奇跡をマグダレーナが体现する、キリストの模範 (imitatio Christi) の様子が述べられている。この世を去るに当たってのマグダレーナの顔つきと行為が、それを示している。

資料七・B ex continua et diuturna vision angelorum radiabat

マクシムスが書いた本によると、彼が近よっていくと、マグダ

ラのマリアの顔は、ずっと毎日天使たちを見ていたためにまぶしいばかりに光りがやき、太陽を見てもこれほどまぶしくはあるまいとおもえるくらいであったという。マクシミヌスは、さきの司祭を呼びよせ、またすべての聖職者たちを集合させた。こうして、マグダラの聖女マリアは、泣きむせぶ人びとに見守られながら、司教マクシミヌスの手から主の聖体と聖血を拝領した。それから、祭壇の階段のまえにからだを伸ばして横たわった。この聖なるたましいは、このようにして天にのぼっていった。彼女が亡くなると、甘美な芳香が教会じゅうにひろがった。七日たつてからでも、教会に足をふみ入れたすべての人たちがこの香りを感じた。聖マクシミヌスは、聖遺体に高価な香料をたっぷりふりかけ、盛大な礼をもって埋葬した。そして、自分も死んだらこのそばに葬ってもらいたいと遺言した<sup>19</sup>。

このセクションでは、光と香りという天国のイメージを用いて、マグダレーナの霊が神の国にあることを民衆に示している。また中世では霊と身体つながりが想定されていたので、彼女の身体も神の国にあるとされた。こうした天国への昇天を示す物理的な兆候は、その類型においても勧告的な意図においても、平安往生伝という仏教説話によくある瑞相に類似している。マグダレーナの聖遺物は文字通り、しかもかなり露骨なやり方で教会が保管するところとなり、それ以降マグダレーナへの崇敬が出来ていったこととの関連で重要である。そして彼女は、人と神の間の仲保者として、導き手として、現世にも存在

を続けていく。告解と改悔による民衆の内的回心を進める動きの最前線にいた説教をする托鉢修道士も、マグダレーナをそうした存在として説いた。『黄金伝説』にある多くの聖人伝と同様、このマグダレーナのお話も、その死後の彼女に対する崇敬で生じた奇跡の伝承からいくつかを選んで紹介している。ここでは、一三世紀の民衆への説教運動の一環として、戦術の社会的・宗教的な変化に関連した例を三つ紹介する。

#### 資料八 *cumque devote confessus fuisset et viaticum recepisset*

毎年マグダラの聖女マリアの墓に巡礼していたある騎士が、喧嘩に巻きこまれて殴り殺された。棺台に寝かされた彼を見た友人たちは、故人のために涙をながし、マグダラのマリアが忠実なしもべを悔懊も告解もしないまま死なせたのは残念だと言って嘆いた。ところが、突然、死者が起きあがったので、一同は、びっくり仰天した。騎士は、神父さんをつれてきてほしい、と友人たちにしたのんだ。司祭が駆けつけてくると、騎士は、敬虔に告解をすませ、<sup>20</sup>臨終の聖体を拝領した。それからまた横になって、死者となった。

このセクションはまず何よりも、マグダレーナが彼女を崇敬する者達に贖罪の機会をもたらすという力を示すものだ。内的な回心が新たに強調されるようになり、良い死に方を求める機運が高まった。つまり、神の恩寵を受けた状態で心から罪を悔いた告解をし、可能なら最後の聖体拝領をして世を去りたい、ということだ。この願いは、托鉢

僧たちの努力を介し、さらに普及しつつあった。教会も、その発展に今まで以上に取り組んでいた。明らかに贖罪を受けるだけの価値すらないと思われるもの達に対してさえ、贖罪の機会は提示された。著者の考えでは、哲学理論上の一貫性を保つためには、煉獄というものの発案と聖人への崇敬とが、この贖罪慣行をもたらした主要な要因であろう。天国に行けそうもないことが明らかなる者達も、煉獄で浄化される。また、聖人たちに向かい祈るもの達を、聖人たちは守護聖人であるかのように助けるものとされていた。この関係にはどこか互酬的な面があり、ちょうど封建制度での守護者や上位の者から、配下の者が何らかの保護や利益を受けられるのに似ている。

この資料では、ある死せる騎士の友たち名が、実にマグダレーナに対して苦情を述べている。この騎士が生前、同聖人を崇敬していたにもかかわらず、当時の説教運動の中核となった二つの行為、つまり告解と改悔を受けられないまま他界してしまったのではないか、という苦情だ。おそらくそこに、自分の責任を思い起こしたのであるう、マグダレーナはその騎士がいったん生き返ることを許し、司祭に罪を告白し臨終の聖体拝領を受けることができるようにした。托鉢僧たちの修道会にとっては、マグダレーナは実に貴重な守護聖人であった。死者を生き返らせてでも、こうした修道会のミッションの成功に尽力してくださるのだから。ラテン語バージョンの最初の一文は次のようになっていることも、言及しておいてよいだろう。

4. *Miles quidam, qui singulis annis ad corpus beatæ Mariæ*

*Magdalene venire consueverat, in proelio occisus est.*<sup>21</sup>

つまり、この騎士が詣でていたのはマグダレーナの墓ではなく、遺体つまり corpus であったのだ。これをさらに字義通りに翻訳するなら、次のようにもできる。

毎年、聖マグダラのマリアの遺体（遺物）に参ることを習慣としていたある騎士が戦場で殺された。」

現代の読者にとってはグロテスクな描写かもしれないが、中世の敬虔のあり方においては、墓と遺体という違いは、重大なものだった。実際の物理的な聖遺物こそが、特に可能なら腐敗していないものこそが、天国にて復活を待つ聖人の地上での臨在と軌跡を起こす能力とを實現するものとされた。そうして遺体により聖人が物理的に近くにいるというのは、マグダレーナがキリストから直接に受けた贖罪と恩寵に比較すべきものと言えるのかもしれない。彼女は生前、悔悛のうちにキリストのもとに来てその足を洗ったからだ。中世では社会的地位や守護関係が重大な意味を持ち、こうした個人的な親しさというのは大いに尊重された。さらに忘れてならないことだが、騎士の仕事とは暴力的で復讐の意味を帯びる場合も多く、社会的地位が高かったとはいえ、地獄を免れるものではなかった。教会の監督の下、新たに内面的な贖罪が説かれたことで、騎士たちを新たにキリストの戦士に作り替えようという努力も高まった。マグダレーナやその他の守護聖人た

ちの助けの下、キリスト者としての実践が騎士のあり方の中でさらに大きな意味を占めるようになった。<sup>22</sup> 先に進み、罪人の救済のためマグダレーナが介入した例を、もう二つ紹介しよう。

#### 資料九 Marian Magdalenam in sui adiutorium invocabat

ある人が、借りた金がもとで獄につながれる身となったが、獄中でたえずマグダラのマリアの名を呼んで、お助けくださいと祈っていた。すると、ある夜のこと、ひとりの美しい婦人が彼にあらわれて、鎖を断ち切り、扉を押しあけ、お逃げなさいと言った。その人は、自由の身になったことを知ると、いそいで逃げた。<sup>23</sup>

このお話は明らかに聖人による守護の例であり、中世の小作農たちにはアピールしたことであろう。封建制度の上位の者達や判事たちからは、彼らは公正な扱いを受けることを期待できなかったからだ。この鎖につながれた男というのは、借金返済の催促を受け、あるいは返済できないために処罰を受けていたのかもしれない。上の日本語翻訳も、それを示している。だが元のラテン語は、次のとおりだ。

#### 9. Quidam dum ob pecuniae exactionem compedibus teneretur,

これをもっと直接・字義的に翻訳するなら、こうなる「金を奪い取ったため鎖につながれたある人…」。Ryan氏の英語翻訳も、こ

ういう観点だ「A man who lay in chains for having committed the crime of extortion」。

このようにマグダレーナは、犯罪行為のために投獄されていた男を釈放している。中世では処罰というものが必ずしも犯罪の深刻さに合致せず、さらに牢獄内の環境がひどいものであったため、投獄されると短期間で実質上の死刑になる場合も多かった事実を、忘れてはならない。マグダレーナにより釈放されたこの犯罪人が、彼女への感謝のうちに生き方を改めたことを読者が願うものかも知れない。さらに明白なこととして、この例は、聖人の守護を得たものが受ける「現世利益」を思わせる例である。これ自体は、一三世紀の説教で説かれた救済の機会の普遍性という視点からは、異質なものかもしれない。もっとも、現代人の耳にはそれ以上に異質に聞こえるが。鎖が切られ、死刑執行を免れるというお話は、中世民衆の聖人崇敬では主流となった話である。徴税人とファリサイ人の話（ルカ福音書一八章一〇～一四節）を比較することもできよう。この聖書の話そのものに、この『黄金伝説』の話やマグダレーナ自身の伝承との共通性が見られる。自分のもとへと来る罪人たちに対して彼女は無制限な慈悲の手を差し伸べた。罪を犯した聖職者に対してさえ、そうである。マグダレーナの執り成しをお願いするものすべてに、彼女の慈悲がもたらされる。内的な回心という点では、司祭であっても支援を必要とすることがある。

資料一〇 cur quareso, Stephane, indigna meis meritis facta rependis?

「おお、ステパヌス。あなたのためにいろいろ尽くしてあげているのに、どうして恩を仇で返すようなことをするのですか。わたしがここから祈ってあげているのに、どうして身もちをあらためようとしなのですか。あなたがわたしを崇敬してくれるようになってからは、ずっとあなたのために一生けんめい神さまに代願しているのですよ。ですから、さあ、起きて、悔悛をなさい。

あなたが神さまのお赦しにあずかるまでは、けっして見すてはしませんから」ステパヌスは、たちまち自分のなかに大きな恩寵がみなぎるのを感じたので、世俗を棄て、修道院に入って、完徳の生活をおくった。彼が死んだとき、マグダラの聖女マリアと天使たちが棺のかたわらに立ち、白い鳩の形をした彼のたましいを抜きとり、賛歌をうたいながら天にはこんでいくのが見えた。<sup>26</sup>

一二八一年に成立した俗人と司祭の教化を促進したJohn Pecham (一二三〇～九二年) の『Ignorantia Sacerdotum』(一二八一年成立、De Informatione Simplicium) を参考にすれば、話の背景が推定できる。資料一〇はテキストもサブテキストも、一三世紀の民衆向け説教運動がそのまま表れたものである。ここでは世俗化した罪深い司祭がいたが、マグダレーナを崇敬していたおかげで彼女から直接に生き方を改め悔悛するよう警告を受ける。無論、すべての司祭が世俗的であったり、邪悪であったりしているわけではない。そうした司祭がいれば、残酷なまでの罰を受けることになろう。だが、ここにあるのは悔悛を

行う必要性ならびに悔悛した者に対する恩寵の救済が普遍的なものだということだ。司祭であることよりも修道生活が評価されているようだが、それは本資料がドミニコ会のものであるためというよりも、修道院では現世から離れることができるのが明確であったことによる。死に臨むときは、その人の魂に暫定的な審判が下される重大な時でありながら、自分の力には頼れない。そんなときにマグダレーナと彼女に使える天使たちの臨在があることで、魂は速やかに天国に向かうことができる。ある意味でマグダレーナへの崇敬とは、告解と改悛という道を進みながら他力に頼ることだとも言える。

以上の内容と特徴を考察することにより、本資料がかつてない高度な救済論への理解を求める俗人の救済に基づいて大衆化し、内面的信仰への転向を現していることを確認することができた。

結語

この資料の冒頭には、一三世紀の民衆向け説教運動を推進したテーマそのものが、マグダレーナに向けられている様子が見て取れる。

マリアがえらんだ最良のものが三つあったことがわかる。すなわち、悔悛あるいは痛悔、内面の観想、天国の栄光の三つがそれぞれある。<sup>27</sup>

この聖女自身が、罪人が回心して説教者となったものであり、贖罪の生ける実例が教会からの最先端のメッセージの中心にいた。その彼



女が隠遁修道者として生きることを熱望したということは、心でキリストに従うもの達はみんな救済を期待できる、修道士や祭司と同様のようなものである、ということを示す。マグダレーナの伝承からは、恩寵を求めるすべての罪人に新しい時代が到来したことが分かる。それは鎖につながれた不運な小作農だけでなく、手を血に染めた騎士たちや墮落した司祭たちも含まれるのだ。

Menache 氏やその他によれば、中世盛期の教会は一種の「死の崇拜」を行い、「恐怖の教理問答」を流布していた。<sup>28</sup> 地獄への恐怖と自分の罪深さの自覚とが、中世のキリスト教の説教に含まれていたことは、確かだ。だが本論文で取り上げた資料はいずれも、肯定的で希望ある言説を告げており、それが中世キリスト教の説教における、もうひとつの側面でもあったのだ。

マグダレーナのお話には、神学的な視点で見ると興味深い側面がいくつもある。特に、神の恩寵を分け与える聖人の役割が興味深い。だが、マグダレーナの生涯そして今や普遍的に受けられるものとなった告解、改悛とミッサを万民のものとする（死後の）役割を述べる資料は、広く入手でき勧告的言説を含んでいた。『黄金伝説』にある他の聖人伝と比べても、この点こそがマグダレーナ伝承の傑出した特徴である。マグダレーナが説教修道会において果たした大きな役割、ここにドミニコ会の守護聖人としての役割がなければ、そうした側面は『黄金伝説』には、あまり明確に繰り返し記されることはなかったであろう。ここに我々は、個人による恩寵への希求というものの萌芽を見るのである。これは、後のプロテスタンティズムそして近世の宗教性の

出発点となるものだ。中世カトリックの聖人崇敬の中でも特に強烈な表れがこのマグダレーナ崇敬であったが、そこに近世への種が見て取れるのである。

<sup>1</sup> 「はじめに」の一部は『日本思想史学』四九号に記載された二〇一六年度日本思想史大会パネルセッションの要旨に基づいて書かれている。曾根原理、松本公一、大島薫、モリス・ジョン「近代化する日本社会の中の宗教」『日本思想史学』第四九号 三七・四四頁参照

<sup>2</sup> 岡田温司『マグダラのマリア エロスとアガペーの聖女』中央公論新社 二〇〇五年、Jansen, K. The making of the Magdalen: Preaching and Popular Devotion in the Later Middle Ages, Princeton University Press, 2001

<sup>3</sup> Arnold, J. Belief and Unbelief in Medieval Europe, Hodder Arnold, 2005. 当時、神学・説教書が作成され、罪と告解、神秘、沈思祈りなどに関する書籍と「往生術」(ars moriendi)の書が増える。

Boyle, L.E. 'The Fourth Lateran Council and Manuals of Popular Theology' in The Popular Literature of Medieval England, ed. Heffernan, T.J. 1985 p30-43. Binski, P. Medieval Death: Ritual and Representation, Cornell University Press 1996参照

<sup>4</sup> 原著一九八一年、邦訳はジャック・ル・ゴッフ著／渡辺香根夫・内田洋訳『煉獄の誕生』(法政大学出版局、一九八八年)

<sup>5</sup> C. モリス(著) 古田暁(翻訳)『個人の発見—1050—

1200年』日本基督教団出版局一九八三年

<sup>6</sup> “Non solum hos qui seculo renunciant et transeunt ad religionem regulares iudicamus, sed et omnes Christi fideles, sub euangelica regula Domino famulantes et ordinate sub uno summo et supremo Abbate uiuentes, possumus dicere regulares.” In John Frederick Hinnebusch (ed.), *The Historia Occidentalis of Jacques de Vitry, Spicilegium Friburgense* 17 Fribourg University Press, 1972 ch. 34. p130

<sup>7</sup> ヤコブス・ウォラギネ、(前田敬作、山口裕訳)『黄金伝説』第二卷 人文書院 一九八四年 四四七頁

<sup>8</sup> 口語訳より

<sup>9</sup> 同上、四三六頁

<sup>10</sup> 前掲『黄金伝説』四三七頁

<sup>11</sup> 前掲『Legenda Aurea p409

<sup>12</sup> Jacobus de Voragine, Ryan (trans) *The Golden Legend: Readings on the Saints* Vol.1, Princeton University Press 1995 p376

<sup>13</sup> 前掲『黄金伝説』四三八頁

<sup>14</sup> 前掲『黄金伝説』四三九・四四〇頁

<sup>15</sup> 前掲『黄金伝説』四四四・四四五頁

<sup>16</sup> 前掲『Legenda Aurea p413

<sup>17</sup> 前掲『The Golden Legend Vol.1 p380

<sup>18</sup> 前掲『黄金伝説』四四六頁

<sup>19</sup> 前掲『黄金伝説』四四七頁

<sup>20</sup> 前掲『黄金伝説』四四八・四四九頁

<sup>21</sup> 前掲『Legenda Aurea p415

<sup>22</sup> Arnold, J. *Belief and Unbelief in Medieval Europe*, Hodder Arnold, 2005

<sup>23</sup> 前掲『黄金伝説』四五〇頁

<sup>24</sup> 前掲『Legenda Aurea p416

<sup>25</sup> 前掲『The Golden Legend Vol.1 p383

<sup>26</sup> 前掲『黄金伝説』四五〇・四五一頁

<sup>27</sup> 前掲『黄金伝説』四三四頁

<sup>28</sup> Menache, S. *The Vox Dei: Communication in the Middle Ages* (Communication and Society), Oxford University Press 1990 p82-83